

神奈川

戦後政治の舞台となった旧吉田茂邸が中郡大磯町に再建され、同町郷土資料館別館として4月から公開された。来館者は開館からわずか18日間で1万人を突破し、2ヵ月弱の5月24日に年間目標の3万人に到達。同町では、横浜、鎌倉、箱根に続く「県内第4の観光地」へ向けて手応えをつかみ、さらなる観光資源の発掘に力を入れることにしている。

吉田茂は1946年から5期、通算6年余にわたって総理大臣を務め、戦後日本復興のかじ取りをした。私生活では、養父・吉田健三（横浜の貿易商）が大磯町に建てた別荘を受け継いで45年に本邸とし、67年に89歳で亡くなるまでの晩年を過ごした。吉田の存命中は、のちに総理となる池田勇人や佐藤栄作らが「大磯もうで」をしたことでも知られる。

外交官出身の吉田茂は、本邸を外国の賓客も泊まれる「迎賓館」にしようと考え、東京歌舞伎座の改築を手掛けた建築家吉田五十八に増改築の設計を依頼。京都から宮大工を招き、総ヒノキ造り2階建て、延べ床面積約1,000平方メートルの数寄屋風建物を完成した。町民は、この邸宅を敬愛の念を込めて「吉田御殿」と呼んだ。

旧吉田茂邸は69年に西武鉄道に所有権が移り、79年にカーター米大統領（当時）が来日した際には、大平正芳総理（同）との首脳会談の会場にもなった。その後、西武鉄道の経営難に伴って公的機関による買い取り要望が出され、県立公園化の計画が進む最中の2009年3月、漏電が原因とみられる火災により焼失した。

再建に当たっては、同町が基金を設けて県内外から約3億円を募り、国や県からの交付金と合わせて約5億4,100万円を工面。2015年3月から工事に掛かり、古い図面や写真を基にして焼失前の応接間棟、新館棟、食堂棟を中心に復元を図った。家具や調度品は、横浜のクラシック家具製造・販売会社などに復元を依頼した。

応接間棟の1階は、日米首脳会談にも使われた「楓の間」。2階は私的な書斎で、畳敷きの部屋に書棚や掘りこたつがしつらえられ、官邸直通の黒電話（レプリカ）などが置いてある。書斎に隣接する浴室のバスタブは、船大工が製作したヒノキ造りの舟形の



焼失から8年ぶりに再建された旧吉田茂邸

旧吉田茂邸再建で観光地化に弾み

もので、吉田茂の日本文化へのこだわりがうかがわれる。

新館棟は迎賓館として用いられ、外国人好みの金色の装飾品を使った「金の間」からは箱根の山々や富士山、相模湾などが一望できる。隣り合う「銀の間」は寝室で、吉田茂が最期を迎えた愛用のダブルベッドも再現された。食堂棟のダイニングルームは、アールデコ調のインテリアで統一されている。

同町郷土資料館は別館（旧吉田茂邸）の公開に先立って、昨年11月に本館を全面リニューアル。常設展示のテーマを「別荘地・大磯に関わる近現代史の人物」に絞り、町内の歴史探訪の情報発信拠点に衣替えた。本館、別館とも県立大磯城山公園内に立地するので、相乗効果による来館者の増加を期待している。

旧吉田茂邸のほか、同町には文豪島崎藤村の旧宅、伊藤博文ら明治の元勳の邸宅・別荘跡などがあり、県が取り組む「邸園（別荘邸宅＋庭園）文化圏再生構想」でも重点地区に位置付けられている。これら埋もれた観光資源を発掘し、まち歩きに面的な広がりを持たせることが、次のステップとして期待される。